傷魂の時代
特43
17

昔話子代の日傷

松江堂

叙

落首てふものゝ最古くより有て世に事を善と悪と詠出て以て好事家の談柄とし傚ふに而して此事の盛んなるは文化文政の間とし依て外記氏が西城の件に至り歌ゐ詩に發句に狂句に浄瑠理文句に狂言筋書ゐ膝栗毛作り替に一ッとして物せざるいなし今其一二章を左に掲げて叙文に代る

○頼母に武士れうゞを、や五八切

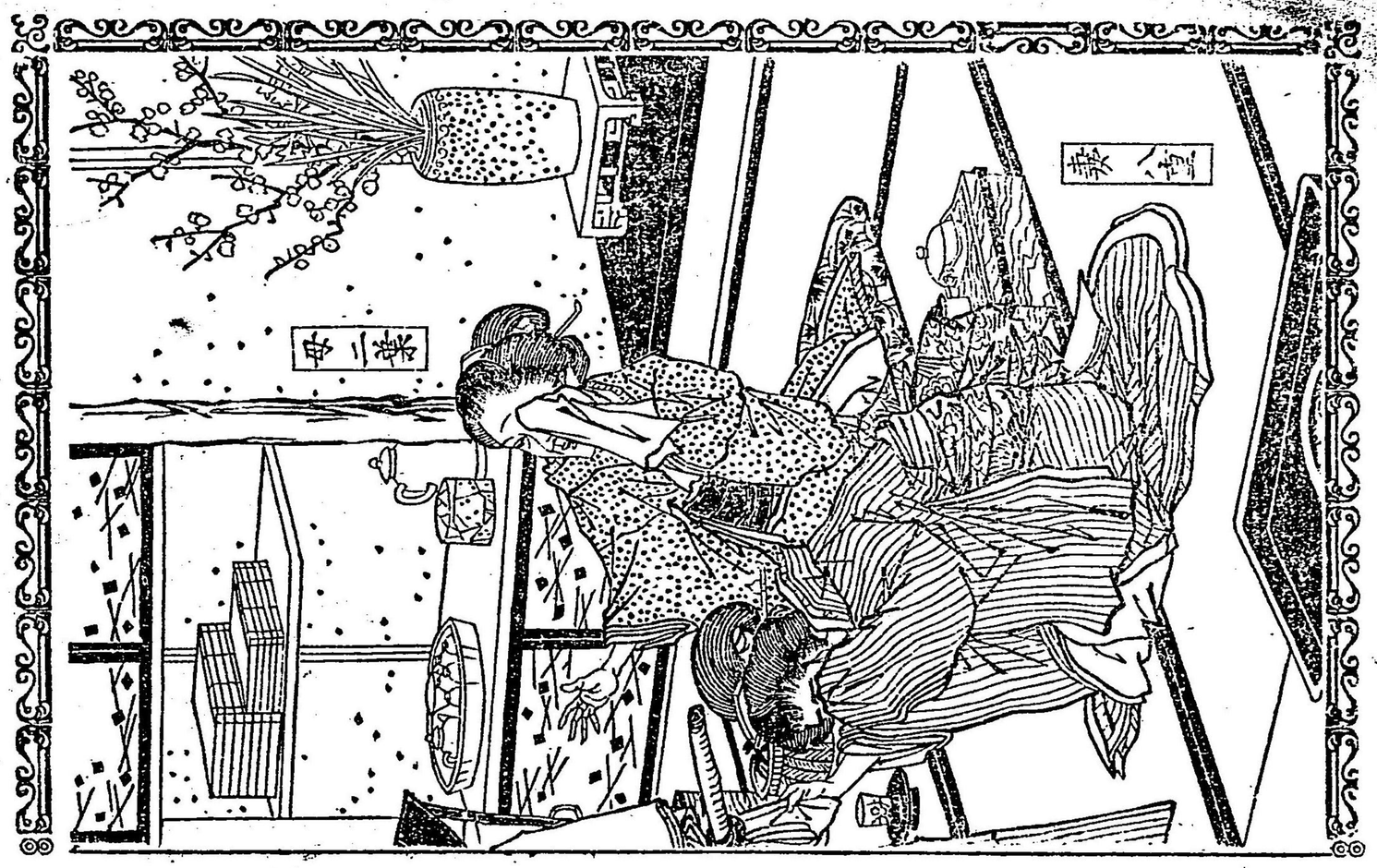
外記あく捨ー花のさゝりと

○亂心を戸まどひもせで右京てん

即死するとと本多沙ばん乗

○席去もんゐ逃ろに げろとゐ職いひ　○雪隱へ逃ると内で咳拂ひ　○逃たのゝ拙者と貴殿れみでゐし○腹切て而　後をんゐ來る

古目萬撰齋誌


孫小中
孫人傑

孫安片孫
孫氏
吟香樓
光

昔語千代田刄傷後編

東京　松亭鶴仙編

第六回

然ぬざよ寥しとぞいふ秋あるよ庭の千種よ鳴く虫の聲もなほれを添るある離れ座敷ゐ只獨り釜よ鳴く音の松虫よ耳を澄して居たりし折しも裏手の門外よて白江氏洗伯どのと呼つゝ扉を敲く者ゐり誰より在んと訝りて小間使する女を招き密かよ容子を窺いするゐ深編笠を被りたる凜々しき武士の只二個供とも連ぜ佇立居るに女い斯と見極めて入んとそるを呼止め別段案内に及ぶまじ拙者い安西伊賀介また是ゐるい沼間右京密々主人に話もあれば来だ忌果ぬと承知して夜中忍びて參りし我々居間へ案内と致そべしとズッと通るに是非もなく雪洞照して先に立庭れ結搆家居の造り善美を盡せる光景い大小名にも多のらぬ驕奢とゐそと知をたれ安西沼間と案内に連れ一間の内へ打通れば洗伯頻りに恭ひて茶を進め點心を參らし遙ゐの下手に謙避り思ひ設ゐぬ珍客のゐシテ御内話の仔細と問ば右京い膝を進ま し御聞及びも候とんぐの去る六月十四日山王祭の宵宮の夜西丸御城吹上の御寶藏へ盜賊入込

み貴重き品々盜み出して裏手の塀を乘超つ代官町を逃行しぐの番士の追手に捕へられ町奉行へ引渡し糺問ありしに其の賊い同僚松平外記ゞ若黨松藏といふ者なる由口書よ依て分明ゐり然るに渠い其夜さり麻布三河臺へ移轉せし松平諒吉方へ罷越して歸るさに半藏御門を這入し折怪しき圓顱の包を持ち躊躇居たると捉んと挑み爭ふ其の折しも番衆の捕手に搦められしが自分に於てい夢聊ゐ惡事を爲たる覺ゐしと飽まで陳辨するに附き奉行所よても其の圓顱を嚴しく繫穿中の由といふに安西語を繼て聲を低め貴殿ゞ驚き道理ゐれども渠の松藏の潔白ゐる惡事を爲すべき者ゐらねば我ぐの推量を以てするも必ぜ無辜の罪ならんと思ふい人の誠にて貴殿を疑ふ解にいゐらぜ固より親しき貴殿の事も爲此事を仮に貴殿ゞ所爲とするとも飽まで曲庇心あれば夢聊ゐも御配慮ゐるな就て拙者ぐの意見といふい渠ゞ主人松平外記先ゐ仲間要助の首級を打て我に送り勇氣を示さん其の爲に若黨松藏を使者に遣し拙者に恥辱を與へしゐど寛仁大度の計ひにて厚く渠を葬り遣しい決して外記を恐るゝゐ非ぜ主人の常に恥辱を受る恨を我に報いんとて死を顧みぬ要助ぐの孤忠を愛ての計ひゐりとい知ぜして松平外記我々古參の者を擯さ人もなげゐる所置振い甚だ以て奇怪なれば今松藏を罪に

墜して渠の氣隨を取辨ぎ退てゝ豫て望の如く拙者ゝ八重子を本多氏ゝ花乃を妻に爲すやうな趣向もあらんと思ふゐり就て今宵來訪せしゝ貴殿茶道の身こそ幸ひ町奉行ゐ親く出入賄賂を以て松藏を罪に墜さん計略を成功てゝ賜らぢや然らば過日帝鑑の間の事をも人にゝ告ゲさじと邪智佞辨ゐ說付られ白江ゝ今更否みもあふぢ最覺束あき事あれども竭せる丈ゝ竭して見んと纔のに承引ゑたりしゃば安西沼間を一顧て夜も深更に及ぶべければ退散せんと一禮しく元來し道へと立歸りぬ恁而後白江洗伯ゝ忌服の果るを待急ぎ奉行の許に到り種々佞辨を逞しうして無辜の罪に松藏を陷いれんと謀れども捗々ゑらぬ事のみなりけり爾ば安西伊賀介ゲ賴みを果すべくもあらぬど斯まで力を盡しゐば彼君とても彼一義を漏されざるゝ必定ゐりと思ひ定めて安途したれば復も川上理順が方ゐ嚴しく貨金を督促しが其年暮の頃ゐりけむ雪降積りて肌寒く懷中手さへ何とゐく氷るゲ如く覺ゆるより城中よりの番下りゐ白江ゝ一酌傾けて若き女と對向ひ雪より深き情をば通ゝしたらばと思ひつゝ川上理順ゲ門邊と過り何ゲ心に點頭て玄關口より音訪ば主個ゝ番ゐて今日ゝ下らず女房一箇家に居たるゲまた洗伯の來りしと下婢ご報知に來ずもゲゐと思へど無解にも歸されず奥に請じて

茶を進め誠に困つた大雪で定めしお冷なさいませう何ゝおくとも酒一つと下婢に運す酒肴下戸ゐゝあらぬ底拔上戸女房ゲ世辭と愛敬とに督促も忘れて飲過し最お納めと置猪口を女房ご取てグッと飲乾定めしお氣に召ますまいゲマアお一つと献す酒蕊辭退しながら受納め半分飲を女房ゝ其の半分をと手を取て飲つゝ其の儘身を寄り添盛りゝ少し過たれど殘んの色香珍しき女の顏を洗伯ゝ倩々目守て居たりしゲエ、モウ我慢の緒ゲ切さと抱き寄たる其の後ゝ嵐に散す雪吹風戸を打音のみ聞えけりこゝにまた川上理順ゲ家の妻ゝ元柳橋の藝妓にて小時と稱ゑ者ゐるゲ理順と怪しき赤繩と結び流れの末の神田川に足を洗つて水道端の邸に入込たる者も名理順の寵愛一方ゐらぢ漢武帝の楚の襄王ゥ就れ比翼の禽とゐり連理の枝とある鐘に曇る巫山の雨催ひ漆膠の交情ゐりしも如何ゐる事にゥ女房の素振の怪しきのみゐらぢ白江ゲ繁繁入込むゝ例の負債の催促と思ふにゝ似ぬ擧動あるに理順ご胷ゝ燃るゲ如く彌々夫と見極て打擲すれども如何な動せぢお前の貧苦よ愛想ゲ盡寧そ男ゝ惡くとも白江さんの身上に惚込だからお前さん所態の爲よ成る人を後に直して末短かく暮す心にお成ゐさい御同朋でも派向の宜白江さんの襟元に就た妾ご憎いゐら打も敲きもするごゝ

ごの夫をするにハ二百兩の金から先へ算段おしあと輪に吹烟の長烟管良夫の面へ突付て久しい間御世話に成たドレお歸りと云ませうと手荷物携へ立出し深き心ハ云ら江洗伯妻に別れて閨淋しさよ圖らず理順ごの女房と怪しき緣を結びしが根ごの水性の唄女上り取廻しさへ並々あらぬに固より多淫の洗伯ハ復なき者と思ひ居る折しもお時が駈來りて今川上が是々の舉動ありしを手ひに通れ來たると告けるに洗伯大いに歡びて渠若し和女を迎に來らバ負債を督促て懲そ程に一生此處に居るごの宜と其儘止め置たるごの白江ハ一旦川上の妻のお時を奪たるより心次第よ驕り來て今ハ誰れも憚らぎ遂よ吉原角町の半藏松葉の全盛たる裝太夫を根引なし元のお園に稱更たれどお園ハ心あさ人よ身受されたる歎しさお層て加へて兄松藏ごの思ひ設けぬ囹圄の身となりしてふ事を聞苦界よ增る苦しみよ病氣と言出洗伯よハ未ざ一夜も打解ねどお時ハ夫とも夢知ねバ裝太夫ごの來る日より若や寵愛傾きて我ハ秋野の捨扇見のへられぬハ知た事と思へバ嫉妬の氣起て修羅を燃すを洗伯ハ在ぎもがなと思ふより邪見お扱ひのみをして果ハお時を追出せしい文政五年菊月の中の五日の事よして本年ハ神田の年番とて祭も一層賑やかふ綺麗を飾し郡衆の中をお時ハ一人鬱々と身の越方を案じ詫元の良夫の惡心よ愛憎ごの盡て歎面した報いハ覿覿今の身となふの廣葉よ置かぬる因果ハ宿世の業ありてか二世と憑みし元夫ごの畏れ多くも御城内よて博奕を云たる負債を督促れ勿體なくも上樣の御佩刀をバ盗まれしハ慥ゥに夫と見たる後去年山王祭禮の夜怪しい姿で歸られたハ是も惡事を仕損じて遁延たとハ後よ知る世の取汰沙に吹上の御寶藏へと忍ひしハ全く圓顱であつたとの話を聞て彌々怖く心よ染ぬ彼人よ身を任せても今日の時宜憑みあき世に在んより寧そ死だごの增であらうと獨言つゝ明神の森の立樹よ細帶を打懸今や縊れんとするを端なく救ひたる女中の連は何人あるこの次よ至りく自ゥふ明瞭ある事あるあるべし

第七回

萩尾花桔梗の色も遷りつゝ玉と結べる白露の上に鳴く音も細り行く昔しハ是も臥猪の床あ起臥茂き傾城の裝太夫と時ゑきし盛りハ今も變らぬど身にふり懸る秋風や野分ハ早き庭の面よ引据られて綁縛の繩の端取り心あき下僕ゞ繫ぐ若松の梢ハよしや折るとも常磐の色の深翠變ぬ節ゞ身を責る苛責の笞今日ハまた照る日まばゆき椽先に相も變らぬ洗伯ゞ綑のまゝに聲荒らげ廓を根引して以還はや半年に近けれど病氣に事擬洗伯に只一度も歡びの顏を

見せぬ片意地のら其身ゐのゝる繩目の艱難然まで己を嫌ふあら己も飽まで辛くする人の依固地を知ぬといふ汝わてもわるまいが去とい聞えぬコレお園能マア物を積つて見ろ堅氣育の處女あら操を守つて仇し男に肌を觸ぬと云事われど旦ゐ呉客を門外に送り夕に越人を閨門に迎ふる勤の身にて誰ゞ爲に意地を立るゝ節を守るのアレ見よ尾花い露の妻寐るも起るも侶俱に仇し心のなきものも人に手折れ花瓶の水よ其身を任すゐり難面も亦事にこそ寄れ再び苦痛をせぬうちに色好き返事を聞せよと責れどお園いさし俯向洗伯さんの深切を讐みとさらく思はねど義理と誠の二道を立るゞ苦界の意氣地にて猪にも添寐の糸栽も仇にい心の花を遷さぢ富貴の襟に就やうな心を持ぬ此の園を憎しと思し給ふなゝ元の苦界に沈めてたべと道に洗伯氣を焦燥またしても片意地ゐ一旦身受を去たのらい再び苦界よ沈めうぞ是非に心よ隨はずゞ斯して遣ると立上りしゞ思ひ返して取出す琴をお園ゞの前に差付け所詮一筋二筋でい我に靡くと言いせまじ十三絃の調糸色音の調子も琴柱にわり今其の琴柱よ膠せゞ爭で呂律の調はん汝の節の誠あらゞ柱を据置て其の儘にわはれ美事に彈じて見よ曲に異ゐる處ゐけれゞ望みの通りに暇を遣ん若し少しでも柱を動さゞ汝の節い動さしものぞ

疾々彈せよいで聽んと椽側近く腰打懸け目守詰るに胷騷ぐお園い今更否みてい彌々苛責に苦まん夫い厭はぬ事ゐれど彈ねゞ節のなきに似るとい言琴柱に膠して呂律合べきものゐらぢ無理難題と知りゐごら彈じと言とも免さるべきやと思ひ屈して爪を取り心に神の應護を願ひく糸のゆ鳴す折しもあれ手先と思しき二三個走り懸つて白江を捕へ天下の法度を心得ゐゞら畏れ多くも城中にく賭博をゐしたる白江洗伯御用ゐるぞ神妙にせよと叫り叫り組んとするに白江と遙に飛退て思ひ設けぬ嫌疑のゐ這と正しく人違ひと言せも果ずヤア拔すゐ刀の盜賊川上理順と其妻ゐ時ごの口書にて慥な証據のあるもゆを陳ぢるとても脱んや手向致すゐ御用ぞと罵も敢ぬにはや折重ゐり高手小手に綁縛たると積惡邪慾の報いにく寔に恐ろしき天罰ゐり〻り茲にまゝ川上理順と博奕の貧債を拂ふよ苦みく御側近く忍入り御差副を盜ゝしれみか猶も文政四年六月十四日の夜に吹上の御寶藏へ忍入ゞ寶器夥多を盜みしのぢ圖らぢ人に支へらぢ辛く其身を免をしゞ反く罪と支さる人に罹りく是が爲我ゞの身と安穩ゐるべしと歡びたる間もあら川や岸の妻石瀬を離ぢ彼處の淵に身ゆ寄し妻のゐ時が死を決しく思と ぢ明せし夏夫れ惡事を竊のに聞たる座光寺八重子松平花乃の二個に救はれ夏夫の爲

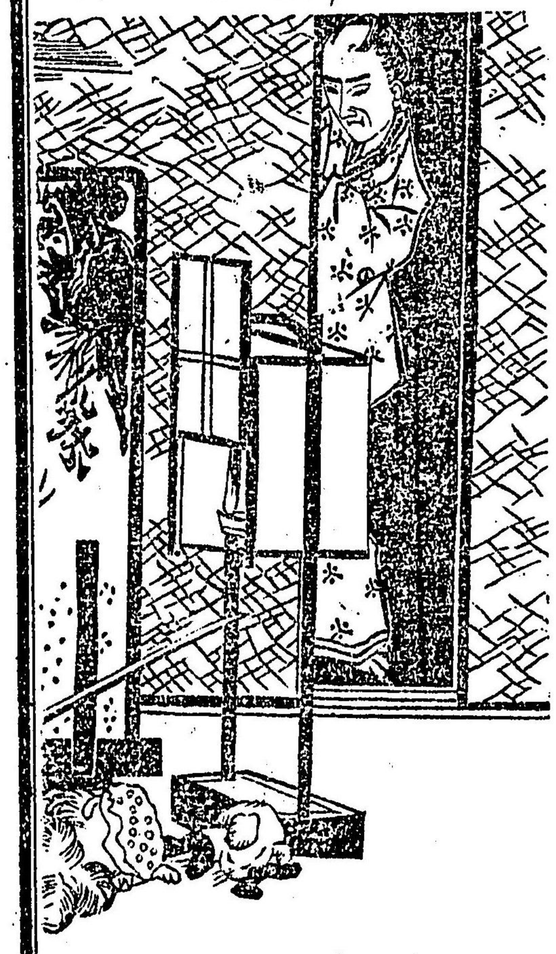
よ囹圄の辛き目を見る松藏ぐの寃を雪ん其の爲に松平家よりお時ぐの言を証據とおしく訴しかゞ直地ゐ理順と綁縛にかゝる惡意を起したる基と如何と尋ねられ包もおゑぬ帝鑑の間の御床下にく賭博せし發黨人と白江にく其の外甲乙十人なりと事明白に招丁ゑたるよゝハ白江を召捕く拷問せよとの嚴命よ白江を始め連累を彝と捕へく拷問ゐもしが証據分明おをゑ一同に恐れ入ぬと罪に落たる處より先に嫌疑晴れずしく幽囚れ客と成にける若黨松藏と赦免れく我家よ歸る歡びに就くも思ふ主の恩花乃八重子が助々のおくゞ何迚無辜を免るゞ今と暇の身おれども參りく禮を返さゞやと思へば些しも猶豫せず囚夜さへ脱のへぬよ其の儘牛込築地町おる外記ぐの邸に赴きたれゞ花乃も外記も無事を歡び其の夜の始末を尋ねらるゝに松藏何をの包むべ兄席を正しく道けるやう去る頃下僕要介の首級を以く安西を威したる後營中よくも御前よ對しく無禮をする者おゑ由と知たれど私りよ渠等が容子を見るに本多の懸想とさく置く安西伊賀と八重子樣に執心おる事益々深く折がゐ在ゞ奪ひ取んと夫に連おる神尾安西沼間戸田などの若殿原が諒吉樣の御邸を覗ふといふ事を聞込み若然成くと一大事と日夜彼方れ御邸を徘徊おして守護そるうち六月十四日と山王の宵宮に方りく彼處も此處もいと賑はしきよ今日こうは大事れ時と思ひしゆゑ朝より麻布三河臺の御邸へ行き立廻をど八重子樣よは其前夜御里へ御出ぐの在たよしよく御出のなゑは幸ひと思へど若や途中よく變事おゑとも圖り難しと心付いくは霎時も堪らず取く返しく半藏御門を這入折ゐら怪しゑ者の女と挑を爭ふ容子よ這奴曲者と引止る其間に女中ゝ伴人を連く難おく行過らきたゞ跡にく此身は憶なく彼曲者と過たれ綁縛の恥辱を受さとと語をゑ花乃は膝を進ませ聞ゞ其方は婢君を守護する爲に夫程まで苦勞をした上禍災よ罹つたとは知なんだ其夜半藏御門にく怪しき者を支へしは婢君おるよし後にく聞きしぐの若し其方ぐの今一足早かつさあら婢君に御目通も出來たらうし寃の繩目は受おんだらうにと言を外記は打消く種々物語をする事あれゞ兎も角衣服を改めく浴み月代しく來れ花乃衣服を渡せよと兄ぐの詞に老實く取出す紋服羽織袴大小までも主人より厚き惠ぐの賜物と松藏大きに歡びく疾くも部屋に立歸り髮月代に浴もおし以前の衣服よ改めく冑々外記ぐの前よ出るを側へ聘寄せさく松藏其方は先年余よりしく暇を遣たる深意を推し妹裝が身に係り裁許を仰たるよしい慥に承知致したが其の後妹は如何致した存じく居るゐら語りく見よと思ひ設けぬ主人が問よ松藏ハット頭を低

げ公儀の御裁許願ひし折妹お園は禮奉公を至しく義理を立る所存と拙者よ頼その仔細も有れバ其の意よ任せくお園が身の年期証文を此方へ取り夫よく公事を下されバ未だよ松葉屋半藏ごの抱ゑと成く居ませうと答へよ外記は莞爾と笑み否とよ夫が問違あり本年妹の裝は白江洗伯よ身受され彼方の家の妻とありしが病よ事托身を任せぬを彼の洗伯は川上の妻のお時が居る故と思ひ誤り其の女を放逐たる上態々よ口説ど何のな靡のぬより洗伯大きよ之を怒り孱弱女を綁縛く苛責の笞よ苦しむ折から先よ其の家を逐れさるお時が爲よ積惡報い其身は綁縛られしと聞より花乃が駈付くお園を助け連歸り介抱あしく兩親の小間使となし居バ此の儀も安堵致すべし夫よお園を勾引せし武兵衛といふは刀の盗賊川上理順が事よしく渠お園をバ憂臥よ沈めし金よく水道端の川上といふ表坊主の株を買く化遂せ此の年月を送りしのど竟よ這回身の科の脫れ難きを察しくの逐一招丁玄たりといふ話を慥のよ聞込たり此の事未だお園よは語り聞ねバ父君よ見參玄たる其後よくお園よも物語よ未だ傳ふきべ事あれど今日は生憎夕御番故最早登城の刻限なれバ明日まれ盲と我居間さしく入たとけと松藏は重なる主人が慈愛にて吾身のみのは妹まで危難を救ひ取れさる此高恩に酬いんには

开も何を以て竭すべきの古語よも小人の忠を盡は則ち其の力を盡し大人の忠と盡すは則は其の心を盡すと言ける如く心もゞ酬ゆる事の難くとも我が畢生の力を竭して須彌蒼海よも彌增る恩義に酬いばやと思ひて益々忠義を勵みしとあん再説洗伯理順等は其の罪惡の免れ難くて竟に遠島の刑とあと其の家殘らず斷絶せしとぞ是は此れ後の事にて故ら此處に擧たるあと爾説松平外記の父頼母は取年並に一日も早く八重子を呼迎へ夫婦交情よく暮すのを老の望みと思ひ居たるに圖らずお園の裝を我家へ引取と褒ふのに頼母は偶然心付き偖い子息も豫てよと北の廊に通ひ詰め斯る女と二世三世契とし故に八重子を嫌ひ幾度いへども婚姻を拒むい此の所以ならん遮莫世良田の遠緣よて家系正しき松平の家に傾城傾國を容るも快々らぬに夫を本妻と直さする子息の心情に隨いんや親と親とが承知の上結納までも取交し殊に去る文政元年一旦實家を後にして良家へ來る途中の難儀ゐ元の家へい歸ともせず我が親族に身を寄て敢て婚道に戻る事おき八重子が前い申すに及バず座光寺殿に對しても面目なき此の始末兎にも角にも松藏に事の心を得させた上萬事と渠に任しおい妹を諌め外記を慰め何とか趣向を付るであらうと思ひ付てい老の一轍雲時も猶豫おら坂や兒手柏の二

面就れを憎しと思ひねど義理にゝ曲て恩愛の絆を外に松藏へ斯と告れゞ畏まゞ下拙の口から申上げても御信用と有ますまいが御前に於て然る嫐弄な事のあいのゝ下拙めご聟に存じて居まするが承まれゞ俟人原の御前を窺ふ事休て聊ゝ穩のなる由あれゞ此間に伉儷の御祝言遊ばさるゝやう下拙めが不及ながゝ周旋を致しまするで御在ませうと夫より直に三河臺なる松平諒吉が邸へ行き八重子に目通を請しかゞ餘人にあらぬ松藏ゆゑ此方へ通せといふ詞に女中ゝ誘と先に立ち案内をなして優室の化粧室へと伴ひ行ゞ八重子ゝお時に髪を捲せ鏡に向つて居るを見るに髪かけさへも松平の家の紋をゞ崩したる唐艸樣の葵艸見る松藏ゝ心を察し頼母ゞ所存に我所存を俱に打明婚姻の事を頻りに促すに八重子ゝ首を傾けてよしや俟人安西們ご殿に優くすれゞとて妾の上ゝ執念も賣綠居るに疑ひなしと言をお時ゞモシ孃樣夫に就てゝ斯々と密かお私語言の葉を聞く松藏ゝ雀躍して出來た〳〵と勇み立ち暇を告る間疾遲し飛ゞ如くに走歸りぬ文政五年十月廿二日月代遠き亥刻過赤城の社の彼方より窺ひ出たる一個の侍士聢に此處と點頭て歩行向ふに駈來る仲間御前樣かと言聲を高しと止めて低聲に先の容子ゝ如何であつたと問れて此方ゝ然俟ふ只今牛込御門より遠見を致せゞ多くの人數箱挑灯を振照して此方へ來るを能々見るに九曜の星お隱岐葵正しく八重子の駕籠と覺しき物をも認たれゞ直樣取て返して俟ふアレ〳〵向ふにさを火影御由斷あるお御前樣。オヽ大儀で有た認恐べと互ひに彼方へ身を隱し今や遲しと待受たゞ座光寺玄蕃ご娘八重子は今ぞ黄道吉日の來る大歸の行粧も晴の駕籠伴廻ゞ徐々とねゞ行く赤城下誰とは知ぜ扉所よゞ顯れ出さる曲者ご物をも云ず斫て入る餘ゞれ事に驚ゞて夫怪我をるお拔たぞと右往左往に遁て行く跡と曲者四邊を見廻し駕籠の引戸を開ゞ〳〵手を取出す媳御寮八重子なゝんと思ひの外思ひ設けぬ理順ご妻是はとばのゞ打驚く袖と捕へ安西樣未だ御丁簡いゞ直ゞませんかと言れて伊賀ゝ其手を拂ひ不入諫言聞耳持ぬ誘來い下部と安西ゝ麹町へと歸ゞ行く「お時ご事此下に物語お し」爾る程に松平外記は八重子と偕老れ契を結び父にも母にも安途させしご登城の度に安西本多沼間戸田間部神尾們が宿意を挾ゞて意地惡く公務の妨げのみ爲て外記を辱むる事前に勝ゞ進退ともに困難おれゞ猶能く之に堪忍び只其の命を仰ぎてゝ公務を扱ひ居たゞしご一日本多伊織（一學改名）よゞ吩咐らゞたる書物を雜務に紛ゞて忘ゞ居たるご疾く果さねゝ再びまた如何おる難題に及ばんと思ひ出ては猶豫もおふず

遠ぎ書類の函を開ゞゞ中にゝ書類のあらぜして「さゝごのにのいとも敢果なし木枯よ思ひなぜそあふぬ垣ねに」と記せし一葉の短冊あり外記ゝ更に心を知ねゞ這ゝ怎麼いのにと驚死て右さま左さま考へつ偖ゝ本多伊織を始め安西自餘の人々ごの我を番士の外に逐目算あるまていと敢果ゐ死職に思ひを懸ゐせそ汝の身よゝ覆ふべき垣ねあしとの事あるの餘まといへど無禮の段今と成ては免し難しと思ひ定めて下城のゝちゝ妻にも敢へて詞を懸ず一間のうちに閉籠りて狐燈の光ゐ端坐あす主の意中を靈知ぬ狆ゝ主人の傍へ行き膝の上に上ふんとするを透さず側らなる小さ刀の抜打に狆の細首打落し血も拭はぜ打眺むる此方の隔てゝ父頼母彼方ゐ立し衝立の後に窺ふ松藏の



居るとも知ず嘆息し乍ら燒刄を目護我明日ゝ八重子と伴ひ築地の邸へ引移る所存ありしゞ夫も亦今ゝ畜餅とありよけり世の俚諺よいふ如く犬畜生を砍たる刀ゝ切味殊に妙ありとう其の畜生に劣つたる安西本多自餘の者を切て愛ひを除かんにも此の刀こそ相應けれ凡そ武士の嗜みゝ最期を清くするにあり我れ奸人們を心の儘に砍殺したる後ゝ其場を去ぜ割腹せん然らゞ父ゐも今生の暇乞を爲すべきの氣丈ゐれども年の上明々地に期と告なゞ船に階して傷を求むる千悔ゐしとも言難し勘ひゐ言んより只他所あぐらゐ暇乞をすることそ却て宜

かんめれ然い言後にて聞給ゞ嘸や嘆に臥給いん八重子い懐姙の者なるに爲ゑ體を損ねなん花乃い日頃我を慕ひて萬談合敵とあすに定めて便ありるべし夫も是も宿世の因あり豈今世に果なうちんや嗚呼我あがら愚痴ありきと涙を拂ひ小刀の血押拭ひて鞘ゑ歛め狆の屍體を片付んと只見れど後に窺ふ人あり一個い逸く逃入たれど一個と體を躱し兼て躊躇影を透し見れど思がゝあき父頼母這い父上にて在せしか何故此處へい來せしぞと問間に頼母い座を占て外記先近うと呼近け父い知じと思いんが毎日御傍に勤むる身五年以來種々の妨げあして安西們ゞ汝を苦しむる其基い八重子を所望したれども既に汝の妻と定り遂ゐ其意を得ざりしゝ伊賀介い其恨を女に酬いん心ならん又本多一學(今い伊織)い花乃を所望ゑさをども口約せし者なりと斷り遣し其の折に花乃い猶も此後の思ひを斷せん其の爲にさゝがにの歌を記し遣しゞ却て渠い忍ばりて益々汝を恨むあるべし然ども渠の汝を恨むい宿夫のみゐ非ぎして武藝學業衆ゑ勝れ古參の者も時として汝に劣る業多けれゞ三び己を省みぎ能を妬む少人の癖之と砍り之を倒して后の憂ひを除のんこそ身を殺して仁をあす則ち武士の譽ぞうし營中兩山に血を注ぐい好しからぬ事あるとも是亦時と勢ひとの止を得ざる事あるなり寛永九年十二月豊島刑部井上計士頭ごの刄傷より今を距る四十年天明四年四月廿六日新御番ある佐野善左衛門ごの田沼山城守を切たるまで前後八度の刄傷あるしが皆私しの宿意と雖も國の爲に奸を鋤き後を清めん爲にして可惜命を牲犧に供ふる者に非るいゐし仍て汝に與ふるい是ある小さ刀ありと遽與に外記い膝を進ず父ゞ恩賜の寶刀を押頂きて席に復り我ごの愚ある心うら父君知し給いじと思ひ惱ゑて候ひしゑ子を覩る事親に及ぎ能く我が心中を御洞察ありたる上と何をか包まん先年駒場野御成の節我新參ゝ身を以て頭酒井山城守より拍子木役を仰付けられ身の面目と其場を下り筆頭安西伊賀介ゑ式の指南を受んとするに渠い先より戸田彦之進か沼間右京に命せられたしと願ひ置たる事あるに突然拙者へ下命に依り益々恨に堪のねく指南をせんとて拙者ゝ額と打割たれとも其儘役目と無事ゑ濟せしかど夫よりして本多們も或と何或い何と種々奸計を廻らせしい幾十度とも定あらぎ今日登城の其節にも本多伊織ゞ拙者に向ひ這と大切の御用ゐるぞ急ぎ認め候へと御用箱を渡せしゞ其折他川に取紛ゝて聽て件の御用箱を開けゞ只今承とりし妹ごの送りし短冊あり夫と見るより神尾戸田問部沼間們い手を拍て拙者を嘲弄おそのとか重役まで聞え上んと騒ぎ立を漸

くゝ和詫て其場を濟しゝど歌の心に判じ惑ひく退身せんとゞ思ひーか倩々思へゞ在昔より難を避て身を脱れ餘命を全うする者あれど這い只一身の苟安を偷みて義を重んせざる者の所爲あり我苟くも武臣に生れ何ぞ斗筲の輩に倣はん四海鎮守の柳營を濟し百世一系の家姓を殺い快的らぬ事あゞら今彼の奸邪を鋤却せずば早晩宿弊を除くを得ん親に先つ不孝の罪を免し給ひて後進の番士が勤仕の便れ爲よ我が一命を棄んよそ拙者ゞ本意よ倭ふおを只第此期れ心擽りゞ八重子が腹の孕子よおそ親の顔だに知ざれゞ定免て父を戀しと謂ん祖父の君ゞの御心よて宜く御育給いるべし次に花乃い幼きより同姓松平諒吉と口約けせし者なをども若我ゞ死しおゞ老體の久しく家政を執給ふ事適ねゞ妹にゞ拙者が豫々其の擧動と志望とを見貫置たる小日向水道町の長谷川左膳ゞの次男彦次郎を養子とおし花乃と婚せ給いりなゞ血縁の絶る憂ひもおく死しても最早遺憾おし情願御許容下されたしと涕うちゝみて述に々る賴母い老の涙脆くオ、天晴おり其れ一言老脆ひても松平賴母子息ゞの義勇を顯ゞして後の憂ひを除らんといふに何とて家を惜むべき然をゞも汝が賴みの一議承引ざをゞ聽をや出ん委細に承知致したり併しおがら今容易渠們を殺ゞゞ其の期に非ず暫時期の到るを待よ心得たるゝと水入ず父子互みの閑談に冬れ夜更て轟々と鳴る鐘れ音も凍りたり

第八回

紹前套再説松平外記い憶おくも我ゞの宿意を父の洞察ありし上家に傳はる長船の小刀を貰ひ受け其の翌る朝ゞ非番おれゞ豫て移轉れ積なりし築地小田原町二丁目の邸よ移りて此方へゞ八重子の介抱をさする爲お園松藏の其れ外に心利たる侍女と仲間兩人を雇入れ最陸まし く活計居れゞ誰とて恁る望ある身とゞ一切知る者おけれゞ松藏のみい之を知り折ゞのおわふゞ其の意を聞き我魁けをせんものと思へゞ外記ゞ夢聊ゝ斯る擧動の見えぬ上猶正首に勤仕すれゞ却て松藏ゞ其の心意れ反覆ゆるゝと疑ひしゞ時しも文政第六年未の四月廿日の晝外記い一間に垂籠て物の本を見てゆりしを何心おく奥方八重子ゞ新茶を煎て持來り左樣に讀書を遊ゞしてい定免てお氣ゞ塞りませう先お茶一つと差出す茶碗を受て思ゞず涕ゞ涕を欠伸よ交らし何やら餘程退屈したドレ茶おゞ啜ませうと言ひ〳〵八重子を顧りて言新らしくいふにゞ非弥ゞ女い總て行狀れ容易ゝらぬ者にして操の堅き者おらでゞ其れ婦人と言難し凡そ武士の妻とありてい其れ准備ゞ肝要にて良夫に如何なる變ありとも哀慟に沈みて事

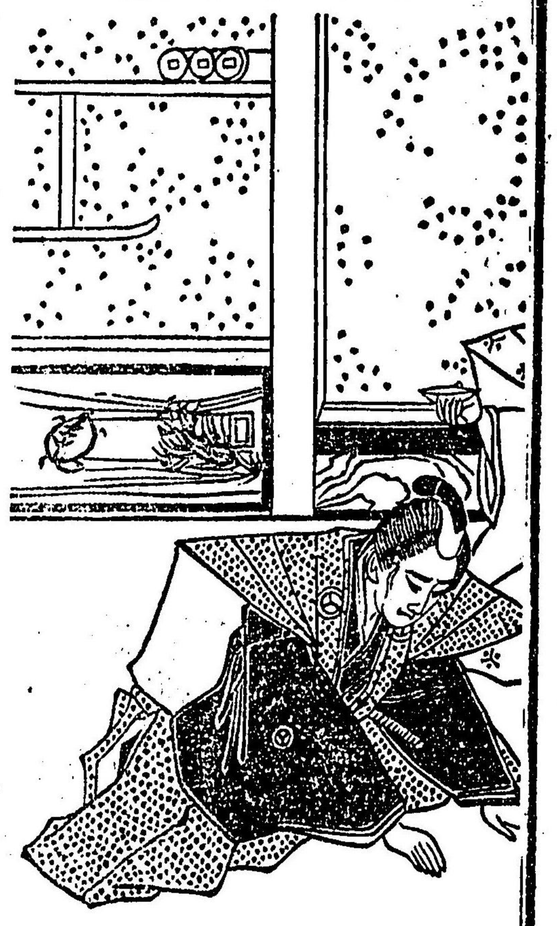
を誤り世の胡慮とある事あく能く其心氣を落付て時に從ふ措置をあし内外を守り脩先され
ば興れ烈女と誰ゝ言ん別て卿よ言置い懐孕たる婦と故ふに慟さに軀を傷けず其れ身を愛し
て恙あく分娩さん日を俟給へ己に嬰兒の生れたらんにい愛育薫陶怠りあく膝下れ敎へ果た
らゞ師を撰みて之を敎へ其の子に從ひ終るべし這い今云ふべき事なふ称ゞ思ひ出しまゝ告
るぞゝー弩あ忘を給ひそと夫と言ぬ遺言と後にゞ思ひ合さるゝ其れ言の葉れ外よ漏て先
の程より覗ひたるお園松藏の両人ごの我よもあらでよゝと泣聲あ立そと松藏ゲ制しゐ陰する
巒虫裡よと心りくまなる鍋と重ぬる習慣の有とし聞ど爭肯と恁る卑しき事をなさん御心惱
し給ふなと何心あく言八重子の答へよいとゞ不便さの增るを我ら勵して外記と重ねて八
重子よ向ひ否卿よと然る事あけれど這い婦人の道よこそ疾くより敎訓を受たる卿の賢さ心
と知てあれば言ずともの事なるゲ語敵のあさまゝよ由なき事をも言出たり併しなゞら武門
の某若し明日よも事ありて身を果さんとも言難けれゞ夫等れ時の心付よ一言卿よいふ事
なり腹ある兒れ顔だゐ見ず不幸よ命を陷す事れありたる時い父君よ請て花乃よ世を讓り腹
の兒をば順養子とあして家名を嗣せようしまた内外の事柄と松藏こそ力あらめ渠よと敎回

恩を被せ充分忠義を盡さべき義理よ纏括て在る事あたゞ能く老實て仕もべしと言つゝ涙を
押包むよ八重子と不審晴やふゞ甲歟乙歟と思ひ詫び夏夫れ前ゐ膝摺寄せ身よ餘りたる御敎
訓心ゐ微して幾久しく守りまするで御在ませうゲ心得難きい今日ゐ限りて斯る御敎訓事の
序と申しなゞら徐々御話し遊ばしても宜しき事を不祥よも死出の旅路の首途ゝ何ぞの樣よ
仰やりまするい深い御恩慮の有ましてゝ二世れ緣しの女房よ語り給はぬ御心ゲお恨しいと
不樂し氣よ問れて外記い頭を掉り否所存ばしゐるよ非ねど武士といふ身よあれゞ今宵如何
ある事あつて命を果さゝ量ら称ば疾より言んと思ひしゝど便ごのおくて今まで延たり並々あ
らぬ和女の事ゆゑ所存のあらば打明して商量敵きよせんものを何條隔て包藏べきと道ども
八重子は猶肯ゞ最憚りある事よ侍れど君が御心を猜するよ妾ゲ上と妹御の御身よりして宿
意を包む安西本多ごの邪智佞奸古參を楯よとりなしも故と君をば蔑視て公務を缺せ或いまた
所天よ痛く恥辱を與へ執念嬪緣千狀萬態に障碍のみを爲すとし聞ば武士の本分刀の手前渠
們を殺して夫子も亦其の塲を去ゞ腹搔切り死を潔くする御心に侍らゞやいと自ゝら思ひ出
しい當歟否歟若し然る向の事にあれば妾も玄蕃ごの娘に侍り夫子が夫人に侍るゝら未練あ歎

きを致しませうと八重よ恁々云云にて予と討死するぞうし路の難儀い松藏と謀りて万事執討へよ卒の兒にと曾ねども男兒にもあれ女まを養ひ育て我跡を續せようしと仰やつて下さるあふべ及ばずとも其心して居るべきに隔給ふも事にこそ依れ喃我が夫と組合せし諸手外して其儘に夫子の膝を搖動せべ外記い屢同嗟嘆して語り出んとする折ゝら其のお答い拙者めが致しませうと入來ると別人ならぬ松藏あり後に續いて裝のお園も供に座に就べ駭く外記に一禮して松藏徐に首を擡げ心志相同して伉儷納る寔に奥様の賢慮明察男子もをさ〳〵及ばぬ所全く殿の御心慮い歎を先に立まじとて只他所あがらの御遺言圖らず御庭でお園とふも承まいつて驚き入たり是か今生のお別あれべ充分別を惜ませ給へお園も篤と御禮を述御暇乞を申さずやと言れてお園い思とずも聲を放つてよゝと泣あく蟬よりも聲立ぬ澤の螢の身を焦す八重子と遵れ烈女なり胸い八千裂百千裂五臟を絞る悲みも涙一滴目わ持ず猶細〻と後々の事を謀りて良夫にい必ず仕損じ給ふなと勵し添る義裂清賢儔罕ある女夫丈ありけり既わ外記い心を決し妻よも遺言あしたれべ今い思ひ置ことなし只此上と氏神なる築土八幡大神へ參詣あして武運を祈らん衣服を出せと言棄て外記い勝手へ立て行き身うちを洗ひ清め八重子ご取出す衣服大小手早く纏ふ平熨斗目献上博多の帶引締め麻の上下ゝ麗〻しげわ大小二口横腰にさすごと遵を義勇の武士玄關先ゝ立出れべ若黨下儀と疾よりも草履直して待て居りお立の聲と供侶に外記い靜ゝに歩み出れべ鞍置馬を引出すに鞭取添へてもらりと乘り牛込投て急ぎけり案下再説松平頼母と外記ゲ決心見るゝらに家に傳る長船の小さ刀を與へしゝべ今日い美事に安西們を斬て武名を轟ゝすゝ若し仕損じて未練ある死ざまあさべ家の瑕瑾何卒天晴豪傑と褒賞さるゝ樣にせよと心の裡に八幡の加護を祈るの外ぞあき父ご憂慮を夫ぞとと知ぬ二葉い良夫の戀性若し永引べ何とせん外記と遠くに離れて在べ萬事に就て心細し自分と公務わ暇あけれべ八重子なりとも迎へんゝと心を碎く折ゝらに若殿樣の御入と女中ゲ案内に二葉い喜び遠慮に及べぬ此方へ通せといふうち外記い入來りて一別以來の挨拶をなし父上樣い御番よや將御在邸遊べさるゝのと聞い二葉い御居間よと言つゝ外記を打見やり這い心得ぬ結束ゝあ今日い四月の廿日よく御儀式とてもあき筈成よ麻上下に熨斗目の紋服何事あるぞと咎めらをハッとと思へど素知ぬ顔否今日い志願ありて八幡宮へ參詣あし其の歸るさよ御座りまするとと言紛らして一間へ入ば父の賴母い夫と見て早

く心を猜しけん自ら衣服を改めつ二葉よも亦裲襠を纏いせ書院に出で土器を取出さしつ銚子よい水を盛てゞ備へける事の次第いまだ知ねど二葉い夫と見るよりも我よもあらでせゞり來る涕覆そを頼母い見咎先外記の幸先祝ん爲れ水盃に不吉の涙卿も武士の妻なゝずや未練者めと叱られていとゞ歎しき二葉より泣じと眼を去ば叩く頼母が心汲別る外記い彌増歎しさを胸よ歛むる四苦八苦親子三人が音よ立ぬ心の歎きよ姑らくと詞もあくて寂寥さり登時頼母と姿を正し二葉よ泣ゐ歎くまじ能く其心を落付て此の祝盃の酌をせよ我のら飲で

外記よ與へん誘疾々と促がしつゝや取上る土器を見れバ益々胸騒がれ一同銚子よ手を添ゑゞ蟲ごの知すゝ氣ごの進まぎまゝ取下してよゝと泣悲歎の涕に裲襠の袖ゝ染地も流れやすらん生者必滅會者定離の道い悟れゞ今更に二人とゐき男子を死に出すと思ひてい涙に涸る聲を低め頼母い土器下に置二葉卿は何も彼も容子を知て歎くのゝ但し未だ知ざるゝと問れて二葉い涙を拂ひ知いで何と致しませう現在息子ごの死出三途の首途を祝ふ水献盃疾より夫と知おごら健氣ゐ外記が心に恥何にも言ぎに居ました妾も其方の母ぢやもの何の未練に止やうぞ天晴美事に打遂せ義勇の譽れを輝うせよとゝ言もの〳〵御番士に撰み出された計で未だうら若き男郎花秋をも待で散果る夫計



りゐ腹の兒の顔さへ見ずに死ぬやつたなら後で其子ご世間を見て何故私にと爹様ごのあい事やらと自ゐら肩身の狭い事であふう在て甲斐あき老の身い生憎後に存命て殺れ我子を殺すとい如何ゐる前世の因念ゐ叱らせ給ふゐ我夫と座にも得堪ぢ泣轉ぶ外記も頼母ゐ骨肉の是ご一世の別れぞと思へば胸に突懸る涕呑込呑込みて詞口籠る六の袖絞る計りけ氣を取直し外記い二葉ゑ打對向母上已に知給はゞ多辯い要ゐき事にこそ何卒親に先達て歎きを懸る不孝の罪免させ給へと言ひ〳〵も父上夫ゐる御玉盞をと請へば頼母も涙を拂ひ嗚呼我ゐごら不吉の涙二葉も泣ゐ我も泣じいざ酌せよと冷水を飲で遞興を押拜ひ献酬九酌ゑ及びしゐご外記い再び父に向ひ明日い勤発て佛參ゐし先祖け墓へも詫を申さん何卒佛間の參拜を許させ給へと請申すに何の遠慮のあるべひぞ誘侶俱にと先に立父に引添靈牌に拈華燒香姑くと看經ゐして父母に盡ぬ別れを惜みつ〳〵暇乞ひして立歸りぬ其の夜も歎に眠られねば過來方を思ひ遣枕を浸らす女夫禽明日と片羽を斃さる〳〵鴛鴦ゐらなくゑ侶俱に絶も入ゐん心地して俱ゑ其夜も泣明せしが廿一日と晝御番にて老若登城の其け前に出頭すべひ筈ゐれど聊ゐ思ふ由あれど病氣と披露し代番を立て香華院に詣でゐとして其日も空しく暮しりるゐ夕刻よりして妹花乃ゞ頼母の用として訪來り一個の包を差出し〳〵を披いて見れば割笄兒ゐり赤銅魚子に金象眼にて葵の御紋を散しさるい則ち先に貰ひたる備前長船の小刀ゑ具足ゑたる者ゐりけり外記と一層父の恩を感ぢるゑ付ゐ何卒して首尾よく仇を討遂せんと勇氣い漸次ゑ加ゑりて花乃ゑも亦意裏を明し同じ涙も新しき歎きに果しゐりけり

第九回

兩御番に三種あり請取御番晝御番夕御番の三組にて請取御番と早朝出仕前番よりして御番を受取り晝御番い老若の登城前に出頭しまた夕御番い申刻に登城ゐして宿直ゐり總く一番六人なるゞ四月廿二日の朝い本多伊織、戸田彦之進、間部源十郎、池田吉十郎、安西伊賀介、松平外記ゞ請取御番に相當して各々明六に登城する此日ゐ姿婆の別を時前夜よりして寐られぬまゝ外記い五更の頃に起身内を清めて一念に神明佛陀の加護に依り武運を助け給ひてよと祈る折しも侍女ゞ御膳の仕度整ひたれば誘と計りに進るを誰そと見れば お園ゐり應と答へく座に直り採る箸さへも今生の名殘と思へば何とゐく氣の進まぬを取り直す椀に浮める勝男武士かつとし聞ば喜びしく聽く進む酒盞も涙を見せぬ八重子ゞ節義勵されくか花

乃まで心音に泣く死別を献酬式の畢りしに外記い納戸へ垂籠く一人着換る繼上下衣服も死しく臭さを止めん爲の伽羅の香の薫止めく立出る玄關先にて松藏ゞ兩手を突く待ゞ居り八重子花乃も見送りの是ゞ顔れ見終のと思へば得了男氣の八重子も今て保難し涙と〻もにさし出そ刀れ手前泣たさを泣ぬ良夫に取縋り言んとしくい言も出ず顔を仰瞻く潸然と泣音い同妹も兄上道を御手拭をと言も畢らず臥轉びワッと計りに泣出せゞ不便の者と見返る外記れ袴の裾を引あがら六時よも最早間もあきよ何とく猶豫し給ふそと勵ます若徒松藏の詞よ外記い涙を拂ひ皆々然ゞと立上るを霎時とばかり右左り袖の袂よ取縋れゞ拂ひも敢ずまた縋るを心弱くく適じと外記い詞を荒ら氣く未練あ八重子花乃まで同じ樣よ恥をかゝすの未未止ると緣を切るそよ夫でも泣か。サア夫い。緣を切うゝ袖を離すのエ、奇怪ゐ其處放せと力任せよ振拂ひ松藏來れと足早よ千代田の城へそ急ぎける歩めゞ疾疾下馬先よまだ登城する人あきの明離れたる旭時此よ來ゐゝる松平の後よ引添ふ松藏が御前霎時と呼留先未一個も登城なきよや靜り切たる此下馬先お話し申す仔細といふと今日安西伊賀介と病氣よ依く代番を立くまた曲淵大學い晝御番を斷りく己よ二人の敵を失ひ目ざそい本多間部沼

田神尾戸田の五人なるが沼間と神尾い夕御番ゐ休息を待討取給ふの夫とも時節を待ゝゝと言出そ誠よ打消く此後を及び宥餘をあさんや猶松藏にと言事ありとく後の事など遺言しつ涙を拂ひ別れ行く心の裏や如何あらん凡そ人の重んずべきい生命と名譽あり事に臨んで生を欲せず義を見く死するい其の名譽を後の世まで輝のさん武士の本懷あるべきか然ども生命を遺惜して功名ともに全き者あり只實名に戀々して死後に恥辱を受るもあんめり憲に弓矢とゐ武士い其れ行ひも難きかも閑話休題單表松平外記と今日を限りの命ぞと水訃盃まで酌交し生て復び歸らじな肯爭年頃重あれる宿意を散し奸を鋤き末の愁へを除のでやいと思ふ心を色目に見せず相番より先に出仕し其の日も無事に勤めしゞ申刻より夕御番の早出登城をたりしかゞ事務と詰所を引渡して請取番い二階ゐる休息所へと下りたるに外記い未だ手を下さず偏へに折を見てわりしゞ斯ともいさやをら眞弓ひく手の糸を斷れたる恨を含む本多伊織外記を暫と打見やりて松平生御貴殿の按摩を久ーく願はぬゞ氣い若くッても老の癖終日碁役を勤めると肩ゞ張て何も堪らぬ未だ御用の殘餘もあれゞ鳥渡一揉揉はれまいのと背向になれゞ松平い委細承知仕つれど御紋服の上より揉ゞ上に對して恐あり御

召替をと勤むるよ伊織い數々骨肯て寔に外記殿の言る〳〵通り然らば着替申さんと小紋の袷に脱替て外記に肩腰揉せつゝうと〳〵睡眠む容子を見て間部源十郎後より小緡捻つて髷に掲け戸田と表を合してと打興じて居たりしが軈く按摩も終りしのば外記い陸尺を近く招き用意の重詰を取寄さする此折戸田と奥へ行き本多間部池田の外に長野勝次郎川村清次郎、堀長左衛門、伊丹甚四郎横山重三郎、北尾友之進、の六人居合せ今外記が取寄たりし物を見るに父頼母ご拜領と覺しく内朱外黑の八寸重にく三葉葵の金御紋いとも得難き器に盛しい鮨菓子あどの比類あり何の風情いあけれども宅より爲持し此重詰何卒お開き下されたしといふ折のうちに沼間右京神尾五郎三郎も夕番にて登城なしつ此處へ來り是い〳〵松平生彼のお美しい奥樣が精神を込てのお重の内頂戴するも身の果報と異口同音に言側のら間部い蓋を取除き成程美事あ御重詰方々如何と言ながら其處等見廻し箸なければ沼間ハ外記を打見やり貴殿い先年番入の節馬糞の行厨に尿の茶漬を食つた事がある〻未だ獣の性の失ぬの箸を探すに手摑で食事をなさるゝ夫ともまゝ我々どもを嘲弄せん爲め態と斯樣な物を持出し見せびらかす氣ゝ外記殿と針持つ詞に赫と焦立今い容謝成難しいで一討ふと思ひしゝど猶も怒を靜めつゝ箸を添ぬい心付あし只今陸尺に取寄すべければ暫時是でもお用ひね有たしと小刀の拜兒を抜て其場に差出せば間部源十郎い手に取て成程美事な此の拜兒作い睨に横谷宗知是も父御の拜領物の夫い然と松平生聞ば當月駒場野へ小鳥御成が有るに付六年前に手遲な相圖をしたる御貴殿の本年も矢張拍子木番末席よりして大切お役儀を仰付けふれるのも頼母殿の御側丈け親の威勢で子の出世併し這番い失錯ぬ樣下稽古でも爲されたのと言ば外記い首を下げ仰の如く先達く組頭大久保殿(六郎左衛門)より命せられし旨が對し安西曲淵の御兩所に指南を受んと鼠山にく稽古の折よ細ひしが何がお心よ障つたのの却て拙者に教へて呉と中中以くお聞入あく遂に稽古も空しく成り其後兩家のお邸へ伺ひされど御不在にて其効なきのこの追々日並も迫るより本多殿に伺つて拙者の宅へ寄合を開きたれども御両所のお出あき故不得止今日御辭退申しておざる。夫い近頃お氣の毒とい言もの〻分限を越て差出た事をすれば隨分夫な狼狽い當然の事でおざるヲと言傍らより一同が詞を添へての嘲弄過言聞ぬふりにて松平い御教示厚く承申すいざお開き下されたしと進めに任せて神尾五郎三郎然らば項戴仕つらんが割拜兒の一箇のみでい人員に相應仕つらぬと言へ

ゝ間部が手早くも外記の差副ぬき取く只今箸を進ずべしと重箱の蓋取より逸く片端より打割つ之を削つく箸となそより堪へ〳〵し松平も今ゝ忍ぶに忍びのね葵の御紋の附たるものと刄を以く打割るとゝ取も直さず調伏同様最前といひ只今といひ餘りに無禮の致され方拙者を嘲弄せらるゝゝ如何程爲さるも宜しけれど上へ對しく無禮でござらうチト謹み候へと言せも果ず五郎三郎調伏とゝ何の謗言貴殿が出せし此重詰取るべき箸れ非るもの貴殿の刀で割た蓋よしや御紋を切たりとくも拙者に御咎めあるべきや貴殿が刀で切割ゝ則ち貴殿が調伏あり若輩の身を三省ず古老に對しく推參千萬調伏あどゝゝと片腹致し口を箝んでお控めされと以前の幷兒中より折外記が面へ打付く突と座を立し袂を扣え無禮過言も程こそあれ外記ゝ西城守の番士貴殿に打れく默すべきやと言をも聞ぜ打笑ひ嘲れく立腹めされるの然らば是でゝ何と召るゝと咳を面へ吐のけく袂を拂ひ起く行く己れ神尾五郎三郎逃るとと卑怯なり歸れとばのり立上るを何した者だ松平此ゝ營中靜かゝめさをと止る右京の面を見詰外記ゝ恨の涙を流し右京どのお聞下され拙者ゝ固より新參よく不肖の者もゑ勤向不束あるのゝ知ねども各位方が六年以還朝ゝ晩ゝの嘲弄罵詈甚だしきゝ勤向を妨げ給ふ事もあれど這ゝ両御番の習慣よく我如何やうゝ陳るとも一朝一夕ゝ改まる事ゝあらねゞ時節を俟んが神君よりしく拜領せし此の長船の小刀ゝ添く父ゝ賜りたる御紋散しの幷兒を折る計りのゝ是も亦當將軍より拜領の御重を割し振舞ゝ亂心あらぞば調伏あり斯まで恥辱を受ながら何此儘ゝ濟すべき神尾を捉へく存心を聞たる上の所存あり放ち候へ沼間氏と氣を焦つなる松平を其儘其處に引据く松平氏またしくも野暮あ言のみ仰しやるご方ゝ出ゝせぬ窓の月先の出様一つでござる夫ゝ貴殿ゝ何ぞと道と父ご父ごと言るゝが然まゝで御親父が大切あら何故退職しく朝夕の世話ゝあさらぬ松平生夫ゝ何ぞや先輩の古老ゝ向つく嘲弄ケ間敷今の一言聞苦し扣え召されと嗜める此時まで御帳を認め敢く一語を發せざりし本多伊織ゝ瞥と見やり沼間氏貴殿も大人氣あい腰拔武士ゝお搆ひあるあと言せも果ぜ松平外記ヤァ言しく置ば不禮過言腰拔武士とと誰ご事ぞ思ひ知やと言も了ふぜ小さ刀ゝ拔くより早く右の肩先斫下るゝ驚く人々止めもやらぞ殿中なるぞ亂心せしかと呼ゝるうちゝ本多伊織ゝ返す一の腕れ冴筆をも捨ぜ死でけりスハヤと驚く沼間右京ご小鬢をかけく一刀同じ枕ゝ臥轉ぶ番所よりしく歸りくる神尾五郎三郎と性來の臆病者とく斯と見るより屏風を取く小楯ゝしさ

をど太刀風劇しき外記ゞの刃先ゆしらい難く逃んとする尻を挾れく階子より轉び落たる其が儘ゝ奥庭さしく逃く行く外記ゝ己ゝ二人を刺留一人ゝ微傷負せしのど目ざす敵ゝ間部源十郎ゞの見えぬゝ怒り猶加りく止むる戸田の手を拂ひ二回三回砍付て番所間近ゝ斬込ゞ奥ゝて知た事公務ゝ預る身を以て新參者を嘲弄し奸佞日々ゝ増長なす汝ゞ輩を征伐ー後の憂ひを除のん義心ヤア奇怪ある其一言汝如きゝ討れんやと言未だ中央あらざるゝ白刃迅くも閃めきて眉間を深く砍付られ嗟咄と止むる右の手ゝ再び深疵を

負しのばァッと叫んで仆反さる生死ゝ定のあらねども既ゝ恨を晴しさゝ猶も吉十郎を伐んと外記ゝ血刃提げ二階より下のける姿を見るより逃惑ひさる池田吉十郎ゝ白衣の儘ゝて戰ふ勇なく逃足出して其場を逃退き寅の間堺れ杉戸を磴と締切り閉させねば外記も今更敵を失ひ出んとすれど出もあらぬ袋の鼠轍れ鮒若し此の儘ゝ捕へらるゝ憂恥さらすゝ本意あらずいで潔よく生害せんと押肌脱で段楷子の第二段目ゝ腰打懸刀逆手ゝ取直せしが我にもあらずハラ〳〵と熱涙を飜しつつ彼方を白眼で突立上り目的敵の本多沼田神尾間部戸田の五人ゝ恨の刃にうゝたをどもそゞ首領さる安西伊賀介、曲

淵大學の二人を無事ゑ許し置こそ重祢〳〵遺憾あれと言既ゑ營中を騒ゲしゑをば再びまゑ渠們を斃さん手段あし只此外記が一命を牲犧にせし効ありて后世營中の風儀を改め新古の差別を論ずる事あく私情の爲ゑ公務を曲祢ゑ外記か横死ゑ何ぞ惜まん皇天后土憐み給へと言も畢らず仆と伏一家尊も慈母も恙あく千年の壽を保ち給へ八重子花乃も身を傷らゑ孝行怠ると勿れ只不便あゑ松藏お園主とも兄とも賴みたる外記に別ゑて便なからん猶亡き後も忠義を勵ゑ子孫の繁昌賴むぞやと再び三び伏拜みァ、我あごら愚痴あり死勇士ゑ死期こそ肝要あゑと左の脇へ突立て央廻せど刀動のゑ腕さらに自在あらねゑあい何事ぞと氣を勵まし右手をさし伸腹膿を掴み出んと焦燥ども是さへ自由利ぬより太息と吻て見廻せゞ母ゑの手づゝら縫與へし守袋の細紐ゑの腕ゑ賁緣蔦羅付き取んとすれど離れぬゞ今ゑ只得楷梯を下り上り、框の土間ゑ飛下り刄を立て咽喉に宛行二度まで深く貫きつ刀を拔て廊下へ登り合掌あして死ゑたるい天晴愛たき義勇ゑ武士惜や行年三十三歳まゑ部屋住の身を以て國家を思ひ後進を憐ゑと泰平無事の昇代ゑ我のら刄の霜となる其名い千代田ゑ松平翠い後にぞ深ゝ望ゝる偖も池田吉十郎い外記ゑ自殺の始末をゑ精く見屆頭たる酒井山城守に知さんと思へど白衣の儘あれゞ同僚井上政之助の上下大小を借受て近臣小膳と諸ともゑ蘇鉄の御間ゑ彼方ある頭の詰所へ注進せしゲゑ山城守ゑ組頭大久保太郎右衛門を隨へて直ちに其場へ出張し創痍者を睨と檢分す此時已に日も暮て灯を頻りに集光などし切れし者と改むるに一人神尾五郎三郎のみ絶て行方の知ざるに山城守い氣を焦燥斯るうちにて一人でも逃たる者の有んにゑ役義の落度御目付に聞えぬうちゑ疾探せと番士陸尺の嫌ひなく御庭の諸所を索めさしぬ

第十回

主人の安危如何ぞと忠義一圖の松藏ゑ案じ詫り〳〵下馬先へ來りて動靜を伺ふゑ夫ぞと思しき風説もあく中刻下りにあり〳〵るゲ堺求めて立歸る鴉が頻りに哀れ氣を啼き騒ぐより松藏ゑ折も折とて烏啼き若し仕損じて阿容〳〵と敵ゑ爲に生擒に御成あされゑ遊ばさぬう武藝に於てゑ手練とて人も恐る〳〵御前ゆゑ左樣の事いあるまいぞ何をいふにも敵手い多勢此方ゑ纔ゝに單身あれゑ萬一恥辱を受給ひて恨を重ぬる事ゑあらぎゃ心懸ゑあ事でいあると行ゞ戻りつ立騒ぐ折しも笹所へ人の駈來て若しや神尾五郎三郎が下城をあしい爲ざる乎と尋

ぬる詞を聞咎め左様あ人と見受ぬども何故夫と尋糸らるゝぞと問返さをく然ぺとよ未だ御目附へも進達あり れバ表向てと語られぬご御書院番松平外記ご宿直に依て本多伊織沼馬左京戸田彦之進間部源十郎神尾五郎三郎の五人を切て自殺したるご中に神尾れ行方知ず頭も大きに心痛去て疾く探せよとの嚴命あり夫故此方を尋糸しと言も了らず立歸るを洩聞居たる松藏い始め て刑を撫下し猶も精しく問んと思へど番所の事ゆゑ夫すら成ず靴を隔て痒を掻く心地せらるゝ折しもあれ以前の男出來りて御安心あれ五郎三郎い尻を切れて二階を落ち白衣無刀の儘にして御番所へ行き拔捨たる白刃を以て蘇鉄の間れ御床下へ匿れ居たるを表陸尺源太郎に見顯され引出され只今手當眞最中また松平外記殿と山城守殿六郎右衛門殿立會の上内檢視の有たる處腹を切り咽喉を二ケ所貫ぬきて両掌を合せ仆れたるよし美事ゝ武士の最期やと人々稱へ居り候ふと告て其儘立歸るを啞と聽たる松藏ご愀への中にも雀躍して築地をさして駈去ぬ思ひい同じ奥方八重子妹花乃い顔見合せ兄を案ずる想ひ音の涙に濕る袖袂お園も傍に慰さめ孫て人に言をぬ胸の憂泣腥したる両の目を覆へど洩る其處へ息急歸る松藏が両手を上て物をも言ず動と其場へ座を占るにお園と水を與へなどして介抱すれど八重子い摺寄り松藏容子い如何ぞや察しに違はず佞人們を皆殺にして潔よく御生害を遊ばしたふうのと問に花乃も詞と添へ日頃健氣な兄上様嘸勇ましき働ふきをあされた事で有うがあと互迭に問懸るお園も肯を撫ゐご ふ兄さん定めて御城れ内の動靜をお聞なされたらうに早く話して奥様や花乃様へお喜びを仰やらぬゝと右左り三個の女に問ゝけらを若黨松藏太息吻き奥様もお嬢様も嘸お嬉去うござりませうお園も為べ御前様い恨み重ある人個と切て綁縛の恥辱も受ず物の美事に御生害遊ばしたとの下馬れ取沙汰猶能く容子を探ふんと氣を操焦燥ど營中の樣事ありとて警固嚴しく少しも後い分らねども已本望遂給ひて御切腹を遊ぜーたと啞ゝに番士の物語に聞ましを聞し奥八重子い思いを彼方に一禮して我ご夫能ぞ佞人們と討て其場を去敢ず健氣る最期を遂給ひし夫にて所天の武士も立ち佞人どもゝ此後い新參者を凌辱まじ所天のお捨遊ばしたる御一命こそ末世まで兩御番士を敬逸ゝ勤仕せしむる賜なき女ながらも此八重子未練よ鄭きと致しませ弥ど只難しきい夫程まで忠義に厚き御身をも後の爲とい言あがら武士の意氣地に楽給ひ縡の心を知らぬ族のアレ見よ外記い一朝の怒に心錯亂騒ぎて場所柄をさへ憚

らぎ名もおき刀傷おしたりと笑んとの郷いしさよ若し佞人の公務さへ妨げざるを存命て事ある日にい御馬前ゑて美事に討死おされんものを惜やとばかり言さして嗚咽らせバ花乃も まゑ涙押へて喃嫂上奴々い雄、雄しく在ませバ兄上様ゞ健氣ある今の話を勇しと思召さんゞ此の花乃い幼稚時よりお恵受々稽古事さへ習ひたる親に均しき兄上に別て泣ぞゑ居られませうり未練者よと蔑視れ笑れるかい知ゞ称ぞも妾ゞ男であるゐらバ代つて切死せんものを夫も適はぬ身の因果と身を振たしてぞ難きけるお園い身も代もあられぬ思ひ今更返らぬ事ながら先年廓へお出の時勤れ意氣地を立貫て神尾とやちを恥去たる恨い却て大恩ある御前の御身に罹りたゝ妾のみかい兄さんまで重ある御恩を受ながら非常の時れお役にも立に立れぬ下賤の身勿體ないが廓にて始めて御目に懸りてより夫と頼びい彼君と思ひ焦慮ー甲斐ゆつて復び御目にい懸れども思ひ設けぬ兄さんに曾バ懸しき其人い御主人様でなゞゑ故所詮適ぬ我が戀と思ひ絶ても絶やらぬ鉄お焚く火の身を焦し今日まで存命居たものを未御恩さへ碌々ゑ送らで永況お別れとい神も佛もあん世のと歎けバ得了男氣れ八重子も今い堪難て保ち保ちし悲歎の涙包ひに餘る流涕の顔を反向てよゝと泣松藏さへも岩を以て砕

のるゝよゑ最苦し況胸を撫つて控へ居る四人の涙八れ袖ちぎるゝ悲さぞ道理ある却而説西城ゑてい番頭酒井山城守を始め組頭大久保六郎右衛門們急ぎ便を駈せさして當番御目附新庄鹿之助ぞ詰所に至りて道けるやう只今酒井山城守組西丸御書院番の番衆れ内急病人の候へバ即刻御醫師願たしとヤすを逐一聞屆けて當番竹内莫仙と詰番數原玄忠を急ぎ西丸へ遣さをぬ是より先同役たる安西伊賀介、曲淵大學、万年彌一郎、松平九郎右衛門其他相番一同に惣登城を命せられ子の刻過に罷出たりまた竹内、數原い西丸城ゑ赴況て其病人を何とか見るゑ松平外記亂心に依り相番神尾五郎三郎、本多伊織、間郎源十郎沼間右京、戸田彦之進ゑ手傷を負せ自殺去たる譯にて醫師も一時ゑ驚きたるぞ手負を逐一診察して藥を與へ手當をなし創痍に深淺ゑ候へども事切たるにゑ之おしとて其儘御目附に書面を上げしゐ當番新庄鹿之助い加泊安部四郎五郎と評議をおして聞ぞ如きゑ死者も外記只一個おれバ矢張常体の病人にて下宿の方ぞ穩便おらん若表立るとさい御規定もゐり面倒なれバ此議如何と両人よゑ山城守へ言けれども酒井い首を打掉て开ゑ穩便に候へども事を包むい宜からぞ六ゝーくとも後日の爲曲て御檢視下されたしと彼是問答あるうちに夏の夜おれバ短くくはや黎明

よりにけり今い拒むも是非なしとて御目附両人も其場に立會篤と實撿をたる上鹿之助より本丸へ外科醫を迎へたまゝるに廿三日ゝ辰刻外科川島周庵と天野貞雲を差向らるゝ猶も曾谷伯安を宅より呼上げ手當をなし再び創痍者を診斷して御目附新庄鹿之助へ左の如く申し立ぬ

百會の下邊に三寸程深さ一寸四分程疵一ケ所右の手首竪四寸深二三分程之疵一ケ所同所大指の脇二寸程深疵一ケ所

問部源十郎

臀ゝぶた横三寸程深五六分程之疵一所

神尾五郎三郎

肩ゝ襟へ懸長さ一尺二三寸程深さ二寸程ゝ疵一ケ所臀ゝぶた二寸程淺疵一所

戸田彦之進

右の頬ゝ之下咽へ懸五寸程深さ七八分程之疵一ケ所右の手首の下竪に三寸程淺疵一ケ所

沼間右京

襟下より咽へ懸深さ五寸程の疵一ケ所

右手疵内外療治手當仕りゝ銘々疵之深淺并に手足厥冷或ゝ〇等強く御座ゝ間脈疵之儀も右に准じゝ事に御座ゝ尤も危篤之儀に付變症等の儀ゝ難斗奉存候

四月廿三日

本多伊織

御本丸當番　竹内莫仙
同　御番詰　玄忠
御外科　川島周庵
宅呼上　天野貞雲
曾谷伯安

這的書取を差出しぬかくて其夜も明渡り廿三日の當番谷自登城おしたりしゝゝ御目附新庄鹿之助より前夜の始末を上達し當日當番の御目附たる金森甚四郎ゝ引渡して創痍的の容体をも言次つ加泊阿倍四郎五郎とゝもに退出了たりける之に依て金森甚四郎ゝ更に酒井山城守とゝもに痍創的を撿視するに醫師の診斷とゝ大ゝゝ相違し本多伊織、沼間右京、戸田彦之進ゝ即死おし神尾五郎三郎、問部源十郎ゝ全く微傷ありゝれど直ちに其旨を書上たるにぞ西城の役人評議の上若年寄森川内膳正より左の通り仰せ渡さる

其方組松平記記義い仮埋いさし疵人義い下宿養生爲致可ヤい

這れ達書的の來りしかば山城守より御目附へ其の趣きを通達し御目附よりと即刻よ御作事方よ下命して坂下御門へ仮門を繕へ御小人目附平野勘一郎同く東浦庄五郎に吩附即死創痍的を駕に乗せ各自宅へ下たる後外記の死骸と乗物に遷し御小人附添御小納松平頼母へ引渡したるい其の夜の五時を過る頃あり因て御目附金森甚四郎い山城守と同席よて當日相番の御書院番池田吉十郎〔五十二年〕長野勝次郎〔三十二年〕川村清二郎〔五十二年〕堀長左衛門〔四十二年〕伊丹甚四郎〔四十七年〕横山重三郎〔三十六年〕小尾友之進〔三十六年〕を呼出して其の場れ始末を尋問し追て評定を開くるべくそハ其の折口書の相違せぬやう心得べしと嚴達し事落着まで差扣え遠慮するやう達たり斯て御目附新庄鹿之助、阿部四郎五郎の兩人へも遠慮の義を申し通じ山城守も表を捧て其の儘歸邸あしされば大久保六左衛門も謹みく登城を控え居たりしとあん却而説安西伊賀介い廿二日の夜を籠て俄り登城に心蒼皇伴をも具せず駈付しご隨即に詰所に到らずして悄々地陸尺溜へ行き事の様を聽糺すに相番松平外記亂心にて同僚五人よ傷を負せ自ら屠腹ゑたりしよしと定りに綜の知了しりぞ心慌忙て鎮まらず乃ち詰所に伺候ゑたるに肚裏よて想了し如く外記い全く宿恨と小禽御成の拍子木番を言附られしに曲淵と俺とご之を拒みたる鼠山の稽古の事を恨んで爰に至りしなり

第十一回

外記の築地の屋敷よい松藏の報知より猶追々の噂を聞き奥方八重子妹花乃を始先お園その他の者まで泪をのゑ氣を勵まし互ひみ諫め諫先られて玄關前より奥向まで清潔にあし蕭然として御沙汰を待たるみ其夜亥刻すぐる頃西城よ外記ご屠腹して朱よ染さる死骸下り々きゑ始と氣強く見えたりし奥方八重子を始め花乃お園い猶さらに變り果たるお姿と血に塗るゝも厭ひあく外記ご死骸の右に左よ取すがり泣より外に事ぞあき爰よまた頼母い各れ死體屋敷々々へ下ると聞き用人その他れ家人らを連築地の屋敷へ走附來きば八重子ご父座光寺玄蕃も家臣を引供し駈りタッ此体を見て八重子を叱り花乃を諫先野邊れ送りの用意を爲し翌晩窮に代々れ菩提所浄土宗深川靈巌寺よ仮葬りを做ーるとり其後伺ひの上築地の屋敷を引とらひ八重子を始先皆牛込れ頼母ご邸へ一ッみありぬ案下再説評定所みあて岩

瀬伊豫守筒井伊賀守本多彈八郎金森甚四郎など立合にて外記に關係れ者を呼出し詰問へ種々ゝ評議して猶それ内情の是非を探りける故白川の關あら弥ども霞柵引ころよして夏と早晩うち過つ秋風立るとなく成ぬ然ゞ松平頼母ハ悴外記ご相番を切てより既に四ケ月を過し早七月に至ゞ亡魂を迎へる盂蘭盆曾れ軒燈籠よいとゞ淋しき秋と成しを哀と妻二葉嫁八重子娘花乃らに言ふ悴の爲ゝ仇なせし族と悪々をゞ既よ夫ハ討果し恨をと其場で消たるあり然るに今それ亡魂を祭る新盆來り悴外記れを思ふに附悴に伐れし本多沼間を始先彼の黨の父母妻子らゞ歎きも嘸らしと想像られて氣の毒に思ふぞうし然るに彼等ゞ方と未ざお咎中にて落着に至らざれゞ表立て墓參りをさへ爲るとならず又外記の頭酒井山城守を始先與頭大久保六郎右衛門以下それ時よ掛り合の人々とをあ逼塞謹慎の身となり晴天白日を見るとれ能とざるも氣の毒れ第一あをば此人々の落度ゆり本多沼間ふゞ罪も輕く納らせたく存ぜるにより窃に上野れ凌雲院僧正を頼を日光御門主のおん聲掛りを願とんと思ふが汝達の所存いゝにぞや二葉八重子花乃詞を揃へ妾らが今日の哀しさに思ひ比べて彼の方々の人の歎きも仰れ通り想像られて痛ハしけれゞ凌雲院の僧正ハ幸ひ御別懇あるにおん頼を

ありておん科かるく早う事の納る樣ゝおん計らひを願ひまつるとよ頼母点頭然らゞ是より夜道なれども恐ぶにと便利なる故上野に到りて成ゝ成らぬゝ凌雲院に頼み見んとて些少の供人ひき連つ上野よ到り凌雲院よ意中を演て頼みけれゞ凌雲院もその志の私あきを感せしご早速宮樣へ事の由を申し上やをたりけん御老中水野出羽守へ日光御門主の御便ひとして執當住心院まゐり公用人山田翁助へ相渡したる御口上書左の通り

西丸御書院番酒井山城守組御番衆先ざりて　殿中不慮のぎ之ゆゑ右御番去う一同此ゝび御吟味中のよし右ハ御裁斷の上如何やうの御咎仰付ふるべくハや計らせられ難く候得ども何も　御代々忠勤の家ごら累世　御高恩の者にて一同一命にも相抱り候程の御仕置に相成そろゝ又と家苗斷絶よも及びハて當人ハゆすよ及ばず多輩れ親族ゝそれ入り奉ゞ且悲歎の程如何ばりと御察し思召そろ不遠　公儀よ於て稀成日光　御參詣も　仰出され格別目出度御時節よも　在せられ候得ゞ右の者ども是非の輕重よ抱とらず御憐愍の御沙汰　在せられハ樣成れゝく　思召よハ尤御政事向の儀彼これ仰立ふれハい深く御遠慮よ思し免しハ得共多輩の者ども悲歎の程御法事中よてい深く御不便

よ思召そろ相成べき儀よしゝと〻何卒右の者ども御咎の節格別御寛宥の御裁斷御座しゝやう被成下度思召し此段御取とりらひの程幾重よも頼入度御便を以て仰せ入き候

日光御門主御便

住心院

八月

斯て如くありゝをゝ寛典を以て速に落着致さすべきなれども猶穿議中あるにより先外記が新参を恥しむめ蔑視するの悪弊を正んと命を捨たる志を無よ爲そべうらぎとて御老中月番松平和泉守より布達そる書附

西丸御書院番松平外記相番どもを刃傷に及候始末御詮儀を遂られ候處相番ども常々嘲弄ごまーき仕おしも有之に付差迫り亂心候様子よ相聞え變事の期に至りしゝてと相番ども立向ひ候者も無之段不覺語の事に候御番勤仕の作法組中申し合の儀等い前々度々仰出さをれ趣も有之處兎角心懸等閑よ相ゐり右番の者ども權高よ我意と立新規の者を迷惑致させ候儀組々風儀れ様よ成行候てい如何の次弟に候向後御番方い申すに及ばず何れの向にても非常の事これある時勤かよ相立うゐ様申し合せ一同相互よ和熟いたし御奉公筋專一よ心懸申すべく候

右之通向々ヱ可被相達候

十月

十月九日よ至り漸取調つき西丸御書院番頭酒井山城守同組與頭大久保六郎右衛門西丸御目付新庄鹿之助同河部四郎五郎取扱ひ不束よつき御番御免のうへ差扣御醫師鼓原玄忠い御呵のうへ差扣同竹内英仙曾谷伯安川島周庵天野真雲い御呵置ゐて濟めり

外記父　松平外記　三十三才
松平頼母　五十七才
本多伊織　四十八才
沼間右京　五十四才
戸田彦之進　三十四才
榊尾五郎三郎　三十才
池田吉十郎　四十二才

高三百俵　屋敷築地
高千石　屋敷牛込築地
高八百石　屋敷牛込五十騎町
高八百石　屋敷小日向
高三百俵　屋敷牛込冷水番所
高千五百石　屋敷三河臺
高千石　屋敷三番町

自殺ニ付御切米上り
御小納戸役御免
高屋敷召上られ改易
御切米上り
高屋敷召上られ改易
清水御用人可十郎惣領
高屋敷召上られ改易
御番召被放隱居謹塡

高千五百石　屋敷五番町　御番召被放隱居詰塡　間部源十郎　六十六才

右何れも申渡しの書面あるども事長きゆ且れバ之を省く

高千四百石　屋敷駿河臺　曲淵大學　三十六才

其方儀駒場野遲鳥がりゑ付席下れ松平外記拍子木役ゑ相成候を心宜らぞ存其日外記吹聽ゑ參り候節申し喇り同人宅寄合の節岡部半之助申すゆ仕せ不參致し外記心ゑ留候樣子ゑて病氣を申立拍子木役を相斷當四月廿二日相番共を刄傷ゑ及ぶ次弟ゑ至候段差迫亂心候儀と相聞之候外記儀氣挾ある生質と存候上と其心得も可有之とあろ喇弄がましき儀申成候段不埒れ事ゑ候依之御番御免小普請入仰付らるゝ者也

右谷ゆ依り猶翌年十一月駿河臺れ屋敷上られ目黒行人坂へ遣る

高千二百石　屋敷小川町　安西伊賀之介　三十一才

其方儀駒場野遲鳥狩れ節席下の松平外記拍子木役に相成候を心宜かゑず存同人宅寄合の節遲刻致し席上ゆ於て外記が心ゑ障り候儀申し鼠山稽古の節も彼是と喇り恥し矣たる挨拶ゑ及び同人心ゑ留候樣子ゑて病氣を申し立拍子木役を相斷當四月廿二日相番共ェ刄傷ゑ及び候次弟ゑ至り候段差迫り亂心候儀と相聞候外記儀氣挾成生質と存候ゝゝ其心付も可有之候の處喇弄ごのまーき儀申し候段不埒の事ゑ候依之御番召放され小普請入仰付らるゝ者也

右谷ゆ依り猶翌年十一月小川町の屋敷を上られ麻布廣尾へ遣る

其外同役御帳書　數庄七郎近藤小膳　同平飯塚早之助内藤政次郎長野勝次郎堀長左衛門川村清一郎伊丹甚五郎荒川市郎兵衛日向辨吉横山重三郎井上政之助小尾友之助の人々或ゑ小普請入逼塞或ゑ小普請入とうゑて先ゝ落着ゆしたりけり是ゑ因て御書院番ゝ元より大御番を始め他の御番方諸組々れ與力同心ゑ至るまで外記が一身を犧とゆして此惡習を一洗ー德川れ家風を正さんとせし志微り其當分ゑ此弊拭ひて取りしが如く止さるゆる世人外記を賞しく戰場ゑ臨ゑ君の御馬前にて築ある働させしよりゝ其勳功遙ゑ勝れりと言あへりけをゞ是と聞く賴母二樂八重子花乃まゑ松藏ゆ園ゑ至るまで然も有ゆんと悅を嬉しきに附まゑ哀さの彌增て時し分たぬ泪の雨ゑ袖のを濡して居ゑ是しが八重子ゑ妊娠れ乃滿玉の樣ある男子を安々產さるに外記が面ざしを其儘なるゆをば賴母夫婦八重子花乃を始矣悅び

よ堪ぢ始めて家内笑顔を含すよ至りぬ然をば此稚子を孫太郎と号け〔後内記〕何をもの寵愛比るに物なし茲に於て松平の家跡を繼べき嫡孫出來よけをば外記の遺言よ任せ若黨松藏を以て是が守役の用人と定めをば松藏と外記に仕る心地しつ是を懷中よし是を膝よし早く御材の仲給へよと寐食を忘をて傳仕へより又花乃の許嫁なる松平諒吉い花乃ご顔かたちの美なるのみならぢ此度の事件にて心の賢あるまで判前せしりば頻りに婚姻を望むと雖頼母方に未ぢ血脉の相續人あらざりー故控居たるに外記が遺腹子男ありしを以て再三再四結姻を促しければ頼母い遂よ黄道吉日を撰んで松平諒吉方へ花乃を嫁ー両家万歳を祝げり此時お園と頼母及び八重子らの依頼により花乃よ傳の女中とあり松平諒吉方へ至り彼處に在しご諒吉また才ありて花乃との中殊よ睦ましかりける故最とや案じあしとて强て暇を貰ひ元の松平へ歸り兄松藏の家に居しが兼て若刀稱〔外記〕の恨を思せし安西曲淵ら夫々に罪科い請たるも存命に在するこそ遺憾あるとと竊らよ思ひ立とゐをば若刀稱の菩提の爲一ッよと忠僕要助の後世を吊らとんとを言たて念佛三昧よて鎖籠りをり密々よその機會をぞ求めける

お園安西曲淵らのとよ附また一團の話しあれ入も开い題を替て他日に殘ー此書中よと是を結局とそ

再説外記い古參らが新參を壓する舊弊を一洗せんとの憤死より其名と聞其働きを聞て是と慕ひ是を快しとせぬ者あのりーかば芳名一時よ天下よ轟ぢ九州陸奥の果までも人集れば其噂のとあとし然れば松平頼母と元より外記ぢ後室八重子同遺腹子孫太郎用人志賀松藏妹お園松平諒吉奥方花乃まで世の譽ものとなと少しく義氣ある輩と大いよ是を慕ひたりとぞ人と一代名と末代とと嗚呼そを是を言か

昔語　千代田乃傷後編　大尾

明治十六年六月十九日出版御届
同　年七月四日出版　〔定價金拾五錢〕

編輯兼出版人　東京府平民　里村吉藏
芝區金杉川口町二十二番地

發　兌　所　松江堂
神田區一ツ橋通り

大賣捌

日本橋通り三丁目　丸屋鉄次郎
横山町貳丁目　辻岡屋文助
木挽町壹丁目　萬字堂
裏神保町　鶴聲社
通り四丁目四番地　金櫻堂
神田雉子町　巖々堂